

こころ日記「ぼちぼち」 その③

「性と生」の学習の限界

性教育の研究と実践を始めてから随分長くなった。実は数年前、性教育の研究から離れようと思った時期があった。

その道を極めることは大事だが、そのことしか知らない人間になりたくないなと思ったからだ。性教育という学問はない。特に日本の教育現場では、やらなくても済まされる学習だ。約20年前にあった性教育バッシング以降、日本の性教育は停滞したままであることにも疲れたと言ってもいいだろう。

1999年旧文部省は、「学校における性教育の考え方・進め方」という性教育の指針である冊子を作成した。

今でいう「包括的性教育」を先取りしたものだ。HIVや援助交際などの項目もあり、人との関係性にも踏み込んだ内容であった。全国の学校に配布され、それを元に副読本を作成する行政がたくさんあった。滋賀県も、知人が編集に携わるなどしたすばらしい副読本があった。しかし、2000年ごろの一部の政治家などによる性教育バッシングから、その副読本を使用しないようにと、県内の小中学校への伝達があった。それから20年以上、学校現場での性教育の実践は後退したままだ。

学校現場にいたときは性教育の後退に抗うように、教員仲間に「なぜ子どもたちに性と生の学習が必要なのか」を熱心に説いていた。

しかし、私が転勤してしまうと、その後を引き継いでくれる教員はほとんどいなかった。すでに教員の世代交代も進み、だれも性教育の必要性を感じるものがなくなったのだと思っていた。



昨年の中を震撼させた芸能界での性加害・被害の問題は、性への関心が高まるきっかけになったことは否めない。出会う人達は必ずこのことに触れる。私たちは、性別に関係なく性被害は起こっていると理解しているので、そんなに驚きはしなかったが、多くの人が「そんなこと信じられない！」と声高に話題にすることに、とても違和感を持っている。

教育現場での性教育が期待できない中、あと私ができることは、地域での「性と生」の情報発信しかないのかなと考え、相談できる居場所を開室した。まちの保健室「ちむちむ」だ。これからは、今までの研究と実践を活かし、困った人たちへのアドバイスができればいいと思っていた。

いざ活動を始めると、障がいのある子ども・大人を扱う施設、学童、学校現場などで対人援助をする人達からの問い合わせや相談を頻繁に受けるようになってきた。ここ最近メディアが性に関するテーマを取り上げるようになり、声に出していいのだという空気が社会に広がってきたのかもしれない。



まだまだできることがある？

一つ一つの困りごとに答えを出すのは簡単だが、それでは根本的な解決策にはならない。しかし支援する人たちは、今すぐにその問題を解決したいという。現場の切実感が伝わってくる。

人間は日々生きている。悲しいことがあっても食べては眠る。性もとても日常的な

ことだ。性は特別で口に出すのも恥ずかしいのは理解できるが、目の前の課題を見過ごすのは良くないことだ。今までのどの現場でも、性に関わる課題はあったはず。何とか解決したいと勇気を出して相談したいという人が増えてきている。相談者からは「今まで誰に相談していいのかわからなかった…」と。

少し前の新聞に「むかし児童虐待を扱うのに、性の問題を取り上げることが少なかった」とあった。養護学校の先生から「生活指導をしているから、性教育は特にしていない」と、やんわり性教育の必要性を否定されたことがある。

しかし、ようやく支援の中での性の問題を、前向きに捉えなおす流れになってきたのだと思う。今やスクールカウンセラーなどの心理の人達も、性加害・被害について積極的に学んでいる。性に関わる問題がないかという視点で子どもと面談することは、とても大事だ。特に思春期の子どもたちは、大人にはなかなか打ち明けられないからだの悩みを抱えていることがある。性教育の必要性に声を挙げてくれる人が多くなるのは嬉しい。

大人のための「性と生」の学習

支援をする人たちへの研修では、必ず事前アンケートで「あなたはいつどのような性の学習を受けましたか？」と尋ねることにしている。

例えば、保育園に通わせる養育者（30代～40代）へのアンケートでは、約80%の人が学校などで学んだと答えている。「その内容は？」との答えは、保健体育の授業で「男女の体の違い」「月経、精通」などが主だった。あるいは集団での宿泊研修前に女子は生理の話とのこと。では男子はというと、違う場所でビデオ視聴をしていたという人もいた。これは学校での教員研修でも、同じような結果だった。

私自身でいえば、もう50年以上前のことだが、小学6年時に女子のみの生理のことを教えられ、男子は外で運動をして

いたのを覚えている。今も変わらない状況に啞然とするしかない。多くの人はそれが性教育だと思っていることがよくわかる。

今「包括的性教育」という言葉を広めているが、まだまだ聞きなれない言葉に、研修会では質問が相次ぐ。

「国際セクシュアリティガイドンス」（ユネスコ編）をベースに、私たちは性教育を進めるべく新たな運動を始めている。

まず、今までの性教育のイメージを変えていくこと。性教育は、よりよい人間関係の学び、人権の学び、自分のいのちを守り安心安全な生活が送れることにつながる学習、そしてすべての人たちのウェルビーイングを目指すことだ。

学校教育を変えることは難しい。だが幸い今、学校への出前性教育に出かける機会が増えている。私は「すきま性教育」と言っているが、少しでも子どもたちに届けられることがあればと頑張っている。

あちこちで性加害・被害の事例を聞くなか、何から手をつければいいのか、どこから始めればいいのか悩むことが多い毎日だが、性のことをちゃんと学びたいという大人がたくさんいる現実、私にはまだまだできることがある、やらなければならないことがあると思うようになってきた。知識こそ性の問題を減らすことにつながるからだ。

学生や若い人たちから、「目からうろこだった！」「もっと早くに知っておきたかった！」という声を聞くと、前を進むしかないと思っている。



つづく